

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四 八〇三三
京都市中京区蛸薬師通河原町東入
電話 (〇七五) 二五三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信③②

稲荷山武田病院院長 土屋宜之/元京都医療センター外科部長
本居宣長さんには健全なものは何の奇もない当たり前なものだ、というどんな場合にも動かぬ深い思想があり、それが大事な判断となると必ず顔を見せるのです。彼には『古事記』の健康な姿に比べると『日本書紀』は病身に見えているのです。そこで日本書紀論の極め付きは、「更に、広く事どもを考え加え、年紀を立てたところはいが、正史としての体裁を整えるのに熱中していた人たちは、我が国の古伝古意を漢文体で表す無理には気づかなかった、と言っています。『日本書紀』が「表に立てられ」、『古事記』が「裏になりて、私もののごとく」扱われた理由を率直に考えれば、ただ浅薄な意味合いでの、史書の体裁の良し悪しにあったとは奇怪なことだ。要するに中国の史書の体裁にのつとた史書より、我が国独自のものがままの史書の方がいいに決まっていると言っているのです。

『昏るに、日はのこりて』

田村佐起三

『自分をつぶせ』

グラフィックデザイナーの飯田光紀師から「感性」を学び、村田鈍羊師から「図案の基礎」を学び、松井忠郎師から仕事をするには「自分をつぶせ」を学びました。「人の力を借りなければ仕事は出来ない。人の力を借りなければ自我を捨てて挑め。そうすると貸してくれるかもしれない。一人なら自由、二人なら自由は半分、十人なら一割、百人なら二分の自由。より沢山のひとと仕事をするならその分に合わせさせよ。但し自分の意見はハッキリと相手に伝え納得を得て進めた結果、自分の意見が形になっても構わない、それが目的だ」と教えられました。
そのためには人より感じ、人より学ばねば結果を得ることは出来ません。お陰様で私はテキスタイル・プロデューサーとして満五十五年を迎えようとしています。

『お話し会を開いています』常楽臺住職 今小路覚真

家族形態の変化、価値観の相違、そうした毎日の生活の中で宗教、特に仏教の在り方の変わりようが顕著です。人流の極端な片寄りによる過疎化と都市化、そうした変遷の中で、いままでも通りにしか動かなかった、動けなかった仏教は宗派を問わず混迷の様子を表しています。正直なところ、何処から、どのようにして手をつけたらいいのかわからず左往右往しています。そうした現在にあって、わたしは八十歳を迎えたことを機会として、寺という形から離れてみることを実験をはじめました。月に一回ですが、レストラン「キエフ」で食事会を兼ねたお話し会を開き、この二月で三十一回を迎えることとなります。十数人から四十人位までと、回によって集まる人数はまちまちですが、また顔ぶれも回によって変わりますが、職業も年齢も宗派もばらばらの、しかも男性が大半を占める集いになっています。話しの内容は真宗を中心とした宗教、社会事案などさまざまです。

『醸造コンサルタント』イタシヨク 福村直

日本酒を醸造する杜氏に対し、ワインではイタリヤでエノログと呼びます。ワイナリーにとつて重要な存在ですが、ワインを造る技術的な部署を担当するのでありレストランのシェフと同じく必ずしもワイナリーのオーナーであるとは限りません。その中でも人気のスターエノログは様々なワイナリーで醸造コンサルタントとして活躍します。彼らの仕事は醸造だけでなく、それ以上に畑の栽培やマーケティングも担当する様々なタイプがいます。特に新しく始めたばかりのワイナリーでは方針だけでなく技術、信頼など全てに渡り不足している部分を補います。ワイナリーによつてはコンサルタントが居なくても品質の高いワインを造れますが、自分たちだけの感覚を頼りにすると年々少しずつ味わいの変化が起こり、それを元に修正してくれる役割も担っています。

健康レシピ

栄養士 國松美也子

《2月レシピ》

春菊の旬は春より少し手前の2月ごろ。独特な香りは、自律神経に作用することで精神安定、リラックス効果がある上に、胃腸の調子を整える働きがあります。
春菊とえのきのお浸し(2人分)
材料：春菊1束、えのき1/2
調味料：白だし大さじ2、水100cc
①春菊をサッとゆがいて絞り、3センチ幅ぐらいに切る。
②えのきは下の石づき部分を切り捨て、1/2か1/3の幅に切り、ゆがく。
③調味料を合わせて混ぜるだけ♪
お好みで生姜の絞り汁を軽く入れてください！

《大原流声明雑話③④》

實光院住職 天納玄雄

如法写経会において書写された『法華経』は、卷子本に製本したうえで、さまざまな供養をほどこし、青銅製の経筒に納めて地中に埋め、塚を造立する。こうして地中に納めた経典は、五十六億七千万年後に弥勒菩薩が成仏して弥勒仏となるその時まで保存することを期しているのである。
『法華経』では元々、経典との関わり方として受持・読・誦・解説・書写の五種を説く。受持は経典を所持すること。読は読むこと。誦は暗唱すること。解説は内容を理解して人々に説くこと。書写は文字通り書き写すことである。『法華経』は天台宗がもつとも大事にする根本経典である。加えて『法華経』は度々、経典を書写する功德を説くことから、如法写経という法要儀式が生まれたのであろう。